



筆葉 蘆古ヨシと高速道路

7万筆の署名を

国土交通省へ提出予定

新名神高速道路の建設により、ヨシの絶滅が迫ってきているといわれる中、昨年7月より始められた署名は、7万筆余が集まり、太田国土交通大臣への提出が予定されている。署名を呼びかけた「SAVE THE 鶴殿ヨシ原」の代表である中川英男氏は「署名は、雅楽関係者のみではなく、いろいろなジャンルの方々から寄せていただきました。NPOの西日本は、筆葉用ヨシと共存できると話すが、実際に共存できるという調査結果は一つも出ていない。筆葉用ヨシは絶滅するのではないかと云つ心配が増えるばかり。署名活動は今後も引き続き行ないます」と語る。

第2回検討会 問題点は山積み

筆葉用ヨシは、絶滅間近?

ところが、高速道路の建設をすすめる西日本高速道路会社(以下NEXCO)は、工事を進めることを優先して準備を始めている。

第2回検討会は、6月23日 高槻市市民会館で開催された。主な議案は1月から行われている地下水やヨシの発芽などの調査の報告にあてられたが、時間不足で駆け足での報告であった。質疑の時間も短く、十分な議論は行なわれなかった。

筆葉用ヨシの採取エリア

筆葉用ヨシがどこで生育しているのかと云うことは今まで公表されていなかったがNPOは「地元の方の了解が得られた」と公表した。なお、実際の採取エリアは「この中の一部」と注記しているところ、このエリア

の4分の1程度の範囲しか筆葉用ヨシの生育エリアではなく、ヨシ原全体からみると面積としても数パーセントに過ぎない。



筆葉用ヨシの生育地。高速道路予定地と事業区。導水路、切下げ地、ヨシ地下茎採取地などを記載。

また筆葉用ヨシの採取地域はヨシ原の上流側である。ヨシ原の入会権は二つの組合に分かれており、上流側が上牧実行組合、下流側が鶴殿のヨシ原保存会である。

筆葉用ヨシのエリアが

高速道路の工事区域(事業区)と重なる

筆葉用ヨシは絶滅へ

ところがこの筆葉用ヨシの生育エリアの道路建設に近いところは「直接改変箇所およびその影響が大きいと考えられる箇所、事業区」(注1)と重なっていることが、NPOから国土交通省の淀川環境委員会に提出された資料によって明らかになった。筆葉用ヨシの生育場所は道路端より60mです。事業区は高速道路の端から100mの範囲なので、40mは踏み潰されることになる。

筆葉用ヨシの生育地が、工事の事業区となれば筆葉用ヨシの生育地がさらに減るばかりでなく、絶滅の可能性はさらに高くなる。

一部が傷つくと全てが消える

筆葉用ヨシは、特別なヨシ

クローンの可能性

筆葉用のヨシと他のヨシとの違いについて、「筆葉用のヨシは特別な性質を持っているヨシで、その特性を変えずに地下茎で繁殖し続け、長ければ1000年以上同じ性質のヨシを伝え続けてきたのではないか」と小山弘道委員は検討会で報告し、さらに「ヨシ栽培の歴史は無い、栽培できるかどうか不明で、調査は始まったばかり。説明はこれから。もし地下茎の一部でも傷ついたら筆葉用ヨシは絶滅する可能性が高い。このヨシは依然として絶滅危惧種である」と筆葉用ヨシの絶滅の不安を強く訴えている。

ヨシ原の復元を二十余年にわたり

目指してきた淀川環境委員会

ヨシ原のヨシが絶滅の危機に至っている大きな原因は、今から43年前、1971年から始まった淀川の改修工事によるところが大きい。淀川の川底を3~4メートル掘り下げたことによりヨシ原は、冠水しなくなり乾燥が進みヨシの生育環境が最悪のものとなっていった。資料によると河川工事前は80%余がヨシ原だったのが、工事後の1974年、ヨシ原は20%に激減し、さらに1982年には、5%となりヨシは絶滅の危機を迎えていた。

「ヨシ原を7割に」

淀川環境委員会の目標

このヨシの危機的状况の中、当時の建設省は、なんとかヨシ原を回復させようと英知を集めて検討し、ヨシ原回復の第一弾として導水ポンプを1996年に設置し、乾燥したヨシ原に水を流すことにした。

さらにその後、建設省淀川工事事務所の中に淀川環境委員会が設置され、2002年(平成14年)に7割程度のヨシ原を確保(注2)という目標をめざして、大きく三つのことが進められた。

その一つはすでに行われている導水ポンプを設置して、水をヨシに近づける方法(導水)を続けていくこと。これは、淀川の水を導水ポンプで汲み上げて水路を作りヨシに水を送るというものである。(注3)

二つ目は、ヨシを水に近づける切り下げ方法。これは淀川の水位が下がった分だけヨシ原を掘り下げて、淀川の水位に近づけ、ヨシ原を創出しようと試みるというものであ

る。

三つ目は、良質なヨシの地下茎を移植して「ヨシが成立していないところ等に、新たに大規模なヨシ原を創出するものとする」(注4)ものである。

この方法で「ヨシ原を7割に」という目標に向けて壮大な実験が開始された。

導水路は1996年から毎年のように下流側へ延し、(注5)ポンプも増設し、昨年も工事が行なわれた。

また1998年(注6)から、年毎にヨシ原の下流側の土地を幾つかの区画に分けて、それぞれの区画をブルドーザーなどで数m余掘り下げられ、多くの地には上流側の良質なヨシの地下茎が撒かれていった。

上手くいけば下流側にも壮大なヨシ原が回復し、全体で7割のヨシ原となる計画であった。しかし、その一つ一つが裏目に出て行く。その後の環境委員会の報告を読むと、いかにヨシの人工的な栽培が難しいものであるかがわかる。

では、壮大な実験のその後の報告を見ていこう。

水をヨシに近づける方法

「ヨシ群落の回復は難しい」

ヨシ原に導水を始めてより13年後、2009年淀川環境委員会に提出された報告には、「もともとヨシが少ないところやオギなどが優占しているところでは水条件の改善のみではヨシ群落への回復は難しいことが判った」(注7)と報告され、また翌年2010年の報告は「導水対策は、既存のヨシ群落を維持するために緊急的に行なってきたが、その効果は十分ではなくヨシ群落の生育範囲

はきわめて限定された状況にある」(注8)と報告された。

ヨシの回復のために淀川の水を汲み上げたの10数年後の結果は、「水を送るだけでは充分でなく、ヨシを回復させるのは難しい」という結果を報告している。

土地を切り下げ、ヨシを水に近づける

「筆葉用ヨシは確認できない」

「既存のヨシ群落に限られ生育」

では、ヨシ原の下流側、土地を切り下げヨシの地下茎(根茎)を撒いてヨシ原の再生を願って大々的に行なわれ続けている方法は、どのようなようになっていったのであろうか。

平成20年度の報告によると、平成15、16年に切下げた箇所は、バッチ状にヨシ群落は見られるものの、大半はオギ群落となっており(中略)秋季には「ヨシ群落が消滅」(注9)と報告され、平成17年に切下げた箇所は「ヨシ群落面積が減少し、秋季はヨシ群落面積が0となり」(注10)とヨシが生育していないという悲しい報告が続く。

さらに平成22年3月に開かれた環境委員会で、ヨシ原の再生、特に筆葉用のヨシの再生は、非常に困難ではないかとの思いを強くさせる絶望的な報告が行なわれる。切下げた地でのヨシの生育状況の報告に続き、「ヨシの質の面からは、筆葉の蘆舌の材料となる茎径12mm以上のヨシはほとんど確認できていない。それ以降の新しい切下げ地においてもそのような水準に達しているヨシは確認できていない」(中略)筆葉の蘆舌の材料となるヨシなど、鶴殿の歴史文化性を特徴付けるヨシは既存のヨシ群落に限られて生育(注11)と報告された。

即ち、下流側にもヨシ原を再生させようと日本の最高の英知を集めて10年以上わたり色々な方法で調査・実験を繰り返してきたが、ヨシの予想した回復はならなかった。まして筆葉用のヨシは再生させられなかった。筆葉用のヨシは、上流側に少し、昔から生育している地域でのみ生育しているだけ、というのである。

ヨシの地下茎採取地

「ヨシの回復状況不良」

下流側に撒くために上流側のヨシの地下茎を採取された地(上流側の地)はどのような状態だろうか。この地は良質なヨシが生育している地だった。当然この地は、良質なヨシが再生されるものと思われていた。

ところが、ヨシを採取された地(ヨシ採取地)は2箇所あるがどうなったかと云うと、採取地1は、平成20年3月の環境委員会では「ヨシの回復状況が不良であることが確認された」(注12)、「ヨシ採取地1では、ヨシ、オギが優占するほか、ツルマメ、アレチウリ等のつる性の群落が増占種となっている」(注13)とヨシは再生せず、つる性の植物に変わっていった様子が報告されている。翌平成21年の環境委員会でもほぼ同様、「秋季では大半がツルマメやセイタカアワダチソウ等の乾性の群落が約半数を占め」(注14)とあり、ヨシからつる植物に変わってしまったとの報告が続く。

では、もう一ヶ所地下採取地2はどうかと云うとこちらも平成18年6月の環境委員会には「ツル植物の繁茂が著しい」(注15)とヨシが減ってツル植物の増加が報告され、さらに平成21年3月の報告も「春季では

ヨシ群落面積が昨年度より減少し、代わりにオギ群落の面積が約2倍に増加した」(注16)とヨシが減り、つる植物やオギが変わっていき様子が報告されている。

ヨシの地下茎が採取された地は、ヨシ原に戻ることは無かった。

筆葉用ヨシは

年々減少

これらのことを証明するようにヨシ原の入会権を持つ方々は「筆葉用のヨシは、減少している。以前は、本数も取れていたが、今は宮内庁などに納める本数を確保するのがやっとの状態」と語っている。

ヨシの減少

質も低下

淀川環境委員会は、日本の最高の研究者の集まりで、この委員会は、建設省の時代も含めると20年以上各側面から調査研究し実験してきた。しかし、河川工事の直後の1974年の20%のヨシ群落の再生も残念ながら達成できていない。数年間の動きだけを見るとヨシ原の増加も見られるが、「ここ20年、ヨシ原は15%程度の横ばいである」。

3年余の調査・研究で

工事着工は無謀

このような状況の中で、NPOは、平成28年には道路工事に入るとしている。淀川環境委員会の20年余の活動でもヨシ原再生の確実な方策を見出すことはできていない。このような状況の中、2、3年の調査・研究で「筆葉用ヨシとの共存」の方策を見出すことは「願望」を語るにすぎない。

オーボエのリード用のヨシ(ダンチュク)を栽培したことのある人は、「オーボエリー

ド用の地下茎を移植してみたが、3年ほどは採取地と同じような、リードに使える質のものが生育するが、5年もすると今まで生えていたヨシと同じような質になってしまい、リードには使えなくなってしまう」といっ。ダンチクでも移植することの難しさが伺える。高速道路ができてから失敗だったということでは、取り返しがつかない。

大臣との約束「焼き原ヨシ原焼き」は反故

「ヨシ原焼き」は反故

「焼き原の日は、道路を閉鎖する」との国土交通大臣と東儀秀樹氏との約束(注17)をNPOは、反故にして、通行させたままヨシ原焼きを行なう準備を始めている。(注18)ヨシ原焼きの重要性は、「雅楽だより」紙面でも語られている。地元の人たちの話では、「今のようなヨシを細かく砕いてヨシ原を焼いてもだめだ、昔のように炎を立ち昇るように焼くから地面に灰が積もり肥料にもなる。今のような焼き方では、くすぶるだけで肥料にならない」と、現在の煙や灰が出ないようにヨシをチップ状にして焼く方法ではないとして意味が無いと語っている。

10年間 凍結された区間

ヨシ原真上の高速道路は不要

このヨシ原の真上を通る高速道路の計画は、1987年、今から26年前に計画された。その後2003年に「京滋バイパスと重複するから」と、抜本的に見直しの区間」とされ、10年間も計画を見直し、凍結されていた。それが突如として昨年(2012年)4月20日この区間の着工となった。その4日後、この着工について現東京都知

事で公団民営化委員でもあった猪瀬直樹氏は「前田大臣は、交通状況を分析したり、審議会で議論することなく、独断で建設再開を決めてしまった。はつきり言って、選挙目当てである。(中略)渋滞増加は麻生太郎政権がリーマンショック対策で打ち出した「土日休日上限1000円割引」という特殊要因(いわゆる麻生割引)によるものだ。麻生割引は2011年6月で終了しているから、その後の交通量は減っているはずだ。(中略)官僚だけがデータを握り、政治家の一声で無制限に道路が作られていく古い政治が復活している。客観的データを無視したら日本は滅びる。」(注19)と記している。

八幡と高槻間は不要

必要性に疑問

この高速道路の建設の理由としては、渋滞の解消、ネットワークの多重化、道路の老朽化の対応が挙げられている。しかし、下の道路図を見れば新名神大津、八幡間と高槻、神戸間が繋がれば、ヨシ原の真上を通る八幡、高槻間を建設しなくとも問題は全て解決することがわかる。

まず渋滞とネットワークの多重化については、八幡、高槻間が無くとも問題は無い。この夏の渋滞情報を見ると、新名神が建設されていない現在でも大きな渋滞は起きていない。ネットワークの多重化は、道路地図でわかるとおり、大津、八幡間は三重のネットワークが出来る。高槻、神戸間も三重のネットワークが完成する。道路の老朽化は、大山崎、京都間が50年を経過した箇所であり、補修工事の必要区間と

しているが、この区間は、京滋バイパス、新名神大津、八幡間と2本の迂回路ができ、老朽化に対する工事も問題は無い。老朽化について考えれば、ヨシ原の真上を通る道路も50年ごとに工事が行なわれ、ヨシ原が荒される事になる方が問題であろう。



関西地区の高速道路網 八幡～高槻間が無くてもネットワークは完成する

当時の環境アセスメント

筆業・蘆舌への言及は一言もなし

なお、この区間について1994年に行な

った環境アセスメント(環境影響評価)では、「重要な植物の現状調査結果」の中で「右岸の河川敷及び堤防は、ヨシ、オギ、ススキ等の草原が発達し、広大なヨシ原が残されている(中略)上記確認種のうち、タコノアシ、ミゾコウジュは、我が国における保護上重要な植物種の現状」による危急種である(注20)と報告され、雅楽、筆業用のヨシ、蘆舌などについては、全く触れられていないばかりか「我が国の重要な植物」として「タコノアシ、ミゾコウジュ」の保全が強調されている。「葦原の保全に務めること(注21)の文言もあるが、これは筆業用のヨシの保全に言及しているものでないことは明らかである。環境アセスメントは、このヨシ原が筆業の蘆舌に使われる世界でも唯一のヨシの生育地であることを全く考慮されていない。これは重大な問題である。

IAIA 原科幸彦教授

「本来、再アセスを行なうべき」

環境アセスメントにおける世界の中心学会であるIAIA(国際影響評価学会)の会長を日本人として初めて務め、IAIAの中で最高賞、ロースハーマン賞を今年受賞された千葉商科大学教授、原科幸彦氏にヨシ原横断の新名神高速道路についてお伺いすると

「あるべき環境アセスメントであれば、この事例は再アセスを行なうべきものだが、日本の仕組みではそうならない。現行制度のアセスは適用できなくても、事業者の自主判断で本来あるべきアセスを実施することは可能(注22)。だが、事業者のIAIA(西日本)はアセスを避けて検討会を設けたのでしょ。検討会は透明性、公開性がポイント。情報公

開と参加をきちんと行い、住民等、様々な主体の疑問にきちんと答える「意味ある応答」をすることが必要」とコメントを寄せていただいた。

筆管用ヨシを守るために

今回の調査で筆管用のヨシは、絶滅寸前の状態にあることが明らかになった。このような現状の中で筆管用ヨシの生育地が「事業区」として工事現場と重なり、ブルドーザーなどがヨシ原を押し倒せば高速道路の完成を待たずに筆管用ヨシは絶滅し、千数百年続いた唯一無二の世界無形遺産である雅楽も原型を継承することができず、世界の文化から消滅することになる。

筆管用のヨシを守るために英知を集め、世界の宝である雅楽を後世に伝えて行きたいと願う。
(鈴木治夫)

(注1)第33回淀川環境委員会 参考資料3、P 23、24 2013年7月23日

以下(注16)まで淀川環境委員会の資料。これらは淀川河川事務所・淀川環境委員会のホームページで見られる。

(注2)『自然豊かな淀川をめざして資料編淀川本川1』p1-20 2002年3月p1-19に「(2)歴史・文化遺産的特徴(中略)雅楽器 ヒチリキのリード部分の原産地である」と記載

(注3)(注4) (注3)の資料のp1-21 (注5)第24回淀川環境委員会、1陸域環境部会鶴殿保全フォーアアップWG p1-28 2009年3月27日

(注6)第30回淀川環境委員会資料1各部分からの報告p2。2012年3月26日

(注7)(注5)の資料のp1-28

(注8)第26回淀川環境委員会、資料1各部分からの報告p1-10 2010年3月26日

(注9)第24回淀川環境委員会、陸域環境部会鶴殿自然再生WG p1-6 2009年3月27日

(注10)(注9)の資料のp1-10 (注11)(注8)の資料のp1-9 筆管用ヨシは「H14年切下げ地でH17調査で1本のみ」確認と記している。

(注12)第22回淀川環境委員会資料1各部分からの報告資料p1-1 2008年3月20日

(注13)(注12)の資料のp1-5 (注14)(注9)の資料のp1-12

(注15)第19回淀川環境委員会資料1各部分からの報告陸域環境部会p7 2006年6月22日

(注16)(注9)の資料のp1-14 (注17)東優秀樹氏2012年11月20日ブログ (注18)『NPO西日本及び日本経済新聞』8月21日付

(注19)猪瀬直樹の眼からウロコ「4人目の大臣が突然決めた新名神建設再開」

(注20)『第2名神自動車道環境影響評価書』p4-27 平成6年12月大阪府

(注21)(注20)の資料のp13-6 (注22)原科幸彦著『環境アセスメントとは何か』岩波新書、赤版、13001、平成23年

平安時代作成の 琵琶楽譜を補修 宮内庁

宮内庁書陵部は6月20日、平安時代に作成された琵琶の楽譜の補修作業を完了したと発表した。

補修が終わったのは「琵琶諸調子譜」59枚と、「琵琶譜」25枚。9世紀前半に遣唐使に加わり、唐で琵琶を習得した藤原貞敏が日本に伝えた楽譜を、10世紀に清和天皇の皇子、貞保親王が編集。平安中期の11世紀ごろ、皇室から上級貴族の発意で書写されたと思われる譜面。



写真提供・宮内庁書陵部

人気の高い 楽器体験

雅楽の楽器は、とても珍しいということもあり、楽器体験は人気がある。



7月7日、子ども楽器体験

7月7日東京オペラシティーでの東京楽所の定期公演では、4歳から高校生までを対象にした無料公開リハーサルで鞆鼓・太鼓・鉦鼓の体験コーナーがロビーに設けられた。子供たちはゆっくり順番を待って、それぞれの打楽器を楽しく演奏していた。打楽器は宮本太鼓店の協力

鞆鼓、太鼓、鉦鼓の打楽器の体験コーナーが設けられ、小劇場のロビーは身動きが取れないほどの人気であった。大人の体験希望者が多く、「1度触ってみたくかったです」と目を輝かして楽器体験に臨む姿が印象的だった。そして劇場内では、舞台と客席とが一体となつて越天楽の唱歌が響いた。
《前号に掲載できなかった演奏会など》
雅楽コンサート、(ドイツ・ケルン) サンクト・ゼーベリン教会
7月11日午後8時
曲目・笙による盤渉調子、御神楽・朝倉ほか
演奏・豊英秋元宮内庁楽部首席楽長ほか
ザルツブルク音楽祭2013(ドイツ)
アンサンブル遊音公演 コレギエン教会
7月22日(月)午後9時
曲目・吉越調音取、胡飲酒破ほか
演奏・芝祐靖、宮田まゆみ、中村仁美ほか
《秋から冬までの 主な雅楽演奏会など》
富山縣護国神社奉納雅楽 (富山)
10月5日(土)午後1時、入場自由
管絃 越天楽ほか 舞楽 萬歳楽 蘭陵王、納曾利 演奏・洋遊会
問合せ 076-421-6957
○音の息吹 (東京)
10月5日(土)午後6時半
東京文化会館大ホール 一般4000円 学生：2000円
芝祐靖作曲「舞風神」
演奏 伶楽舎 *他に能楽・素囃子、尺八、ダンスと邦楽など
問合せ 03-3467-5421
伝統WA感動実行委員会事務局
今宮神社 秋の大祭 (京都)